令和８年度 ＳＳＴＡ福島支部
夏季研修会実施報告書

【実施日時・場所】令和８年８月７日（金）～８日（土）＠東日本大震災・原子力災害伝承館
双葉南小、フタバスーパーゼロミル（A コース）
福島第一原子力発電所（B コース）
Ｊビレッジ
【参加人数】３２名（小学校２３名、義務教育学校１名、大学院１名、行政１名、民間６名）
【研修のねらい】
- 東日本大震災から１５年が経つ福島県の現状を見つめ、次世代の科学教育を担う人材の育成を図る。
- 震災から、さらに３０年後の未来に向けて「私たちが教員としてどう生きるのか」を語り合い、未来へのアクションプランを作成することができる。

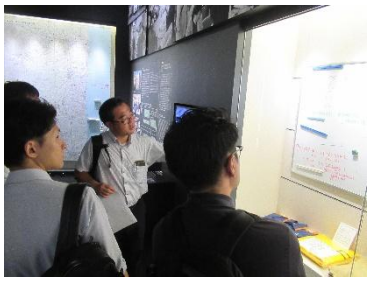
【研修の様子】
1日目(8月7日)
○ 東日本大震災･原子力災害伝承館

東日本大震災・原子力災害伝承館の見学は、西田敏行さんのナレーションから始まりました。当時の映像や、リアルに残された会議室のホワイトボードからは、現場の緊迫感と大変さがダイレクトに伝わってきます。被災したボロボロのぬいぐるみ、取り残されたランドセル、復興の思いが残る黒板といった展示は震災の悲惨さを深く物語る一方、廃炉への取り組みやロボット開発などの産業発展には未来への確かな希望を感じさせられました。最後の当時の写真展示を見つめる中で、当時の様子に思いを馳せ、胸が詰まりました。過去の爪痕と未来への歩みを同時に体感し、防災と復興への思いを新たに刻む貴重な機会となりました。

東日本大震災・原子力災害伝承館見学







見学後は昼食です。東日本大震災・原子力災害伝承館の隣接する双葉町産業交流センターの会議室をお借りし、地元のお弁当屋さん「ぽてと」様のお弁当をいただきました。「ぽてと」は、復興の現場で働く作業員やドライバーたちのため早朝より店を開けるとともに、避難指示解除後に帰町した地元の人たちが連日訪れるお弁当店であり、その様子はNHK「ドキュメント 72 時間」でも取り上げられました。おいしいお弁当を頬張りながら午前中の見学の感想などを話す姿が見られました。

さらに昼休みの最後には、みんなで屋上へ移動し、双葉町を一望できる屋上から今回の講師である、菅野篤司さんより震災後の双葉町の様子をかなり詳しく、深いお話をしていただきました。ニュースや書籍などでは知ることができない貴重なお話を聞くことができました。

急遽開催された菅野さんによる屋上から双葉町を眺めようツアー！







「ぽてと」のおいしいお弁当

双葉町から見えるきれいな太平洋を背景に記念撮影



1日目の午後からは2つのコースに分かれて見学です。

○A コース

【双葉南小学校】

震災当時避難した際の状況がそのまま残る双葉町立双葉南小学校を参観し、原子力災害の教訓と震災教育の重みを再認識しました。黒板の日付は３月 11 日その当時のままであり、児童の所持品もそのまま残された校舎からは、日常が奪われた出来事の重大さが強く伝わってきました。一瞬で日常が一変する災害の恐ろしさを目の当たりにしたことで、震災の記憶を風化させてはならないと強く実感しました。



震災当時のままの状態残されている
双葉南小学校







【フタバスーパーゼロミル】

福島イノベーション・コースト構想の参画企業である浅野撚糸株式会社「フタバスーパーゼロミル」を参観しました。地域の復興を願い、新産業の創出や交流人口・雇用の拡大を目指す力強いエネルギーを感じました。工場参観の後には、同社開発の新素材「SUPER ZERO」を使用した高吸水でふわふわなタオルやハンカチを、お土産として購入する参加者の姿も見られました。







○B コース

【福島第一原子力発電所見学】

廃炉作業の進む福島第一原子力発電所の見学を行いました。はじめに東京電力廃炉資料館において、原発事故から現在の廃炉作業の取り組みの説明を受けました。移動のバスの中でも周囲の建物の説明や震災当時から復興の取り組み状況などの話をいただきました。２０分ほどで第一原子力発電所構内に到着です。１号機から４号機の一望出来る高台のような場所でバスから降り、廃炉作業の進む現場を見学しました。初めて原発を見る参加者からは、「意外と大きいことにびっくり」「ここで震災当時働いていた人はどれだけの恐怖だったのだろう」などの感想が聞かれました。
見学の時間はあっという間でしたが、最新の機器や技術などを駆使しながら廃炉作業を進めていることも説明から分かりました。





出典：東京電力ホールディングス

○ 講話「震災から15年の歩みと未来への展望」講師 菅野 篤司 様



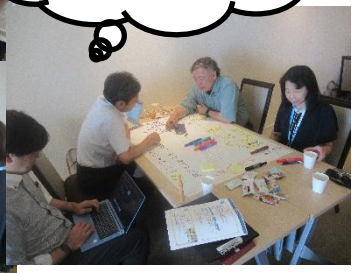
福島民友新聞社論説副委員長・東日本大震災・原子力災害伝承館客員研究員である菅野篤司様から講話をいただきました。菅野さんは震災当時県政担当として災害対策本部を取材し、その後東京支社報道部担当となってからも国会や復興庁、原子力規制委員会など震災復興に関わる行政機関を中心に取材を進められてきました。その後ふたば支社長として被災地の復興の様子を最前線で取材し報道されてきました。

講話から、菅野さんが目の当たりにしてきた震災当時の災害対策本部の緊迫した状況や復興の歩みの中ですべてが順調ではなかったことなどを知ることができました。また、震災教育のポイントとして菅野さんが考えていることもお話いただきました。「災害を知ることだけではなく、困難と向き合い戦ってきた人々の生き方から学ぶこと」「多くの知識を持っていることでアンテナが高くなり自分の生き方が変わってくること」など、子ども達に育ててほしい人間性などの面からもご教示いただきました。２日目のグループ協議に向けたヒントがたくさんあふれた講話となりました。

2日目(8月8日)

○ グループ協議



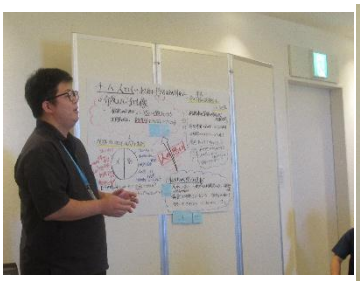


白熱する議論



福島の未来に向けた教育プラン構想についてグループ協議を行いました。グループは年齢や役職の近い人同士のグループ編成となっており、それぞれの立場に合わせて震災教育の単元構想や研修計画を考えたり、人材育成のためのアクションプランを考えたりとさまざまな意見が交わされました。約２時間半の協議時間でしたが、あっという間に過ぎてしまい、まだまだ話し足りないような雰囲気に包まれていました。

各グループからの発表を受け、「わくわくするか」「現実的な計画か」「新しい魅力発見」の３観点で講師の菅野さんから順位発表と講評をいただきました。最優秀のグループには前日見学をした浅野撚糸さんのタオルが景品として贈呈されました。どのグループの発表も２日間の学びが凝縮された内容になっており、この研修の充実ぶりがうかがえました。







どのグループも
素晴らしい発表です！！



○ 閉会行事



遠藤謙一常任理事より、２日間の研修の総括をいただきました。総括の中で、震災当時、遠藤常任理事は担任していた子ども達に、ランドセルを持たせて避難させたという話がありました。なぜそのような指示をしたのか改めて振り返ると不思議ですが、ランドセルを抱えることで不安や恐怖が少し和らいでいるような子どもの姿もあったとのことでした。震災当時の対応や復興に向けて誰もが正解の分からないなか、試行錯誤しながら前に進み、今もその最中であることをこの研修を通して多くの参加者が感じました。